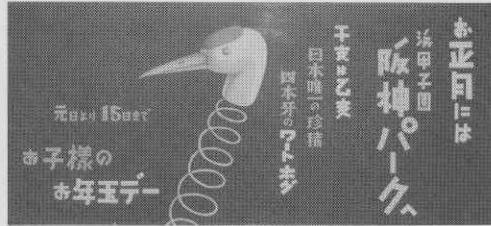


西宮市立郷土資料館ニュース



1992. 7. 1

資料館ノート

第7回特別展 郊外生活のすすめ1900/1950

—— 電車ポスターにみる西宮の郊外生活文化 ——

(平成4年8月1日→8月30日)

合 田 茂 伸

1. 郊外電車

明治7年(1874)、関西地方最初の鉄道として官設鉄道大阪―神戸間が開通した。このとき、西宮にも停車場が設けられたが、発着は1日あたり8便と少ないうえ駅間距離が長く、やや長距離向きの汽車鉄道であった。明治18年阪堺鉄道は最初の私設鉄道として開業し、難波―大和川間を汽車が走った。そのうち、明治26年摂津鉄道、明治28年最初の営業電車京都電気鉄道、明治36年大阪市営電気軌道などが開業していったが、それらは、汽車あるいは市内電車であった。明治38年、はじめての都市間電車・郊外電車として大阪出入橋と神戸三宮を34駅・90分で結ぶ阪神電鉄が開業した。5年後、箕面有馬電気軌道(のちの阪急電鉄)は宝塚―梅田・石橋―箕面間に電車を走らせ、大正9年、大阪梅田―神戸上筒井間を開業した。阪神間は、国有鉄道・阪神電鉄・阪急電鉄3線が並行する競合路線となった。西宮は大阪通勤圏にはいった。昭和2年には阪神国道電軌が大阪西野田―東神戸間を開業した。これら電気鉄道経営は、新しいビジネスとして注目されていて、その敷設申請数は雨後のたけのこのようであったが、それらの多くは道路に敷設された軌道上に電

車を運行する「軌道条例(明治23年公布)」を根拠法にしたものであった。軌道条例による新線敷設許可は、都市内道路を整備してゆく政策と深くかかわっており、電気軌道の開業に併わせて道路を整えていった。当時、都市の道路は江戸時代から踏襲した狭雑な街路のまま、都市整備の重要な課題のひとつとなっていたのである。電気軌道は鉄道としては、速度・輸送量などに制約があった(営業年限は30年・軌道幅は内法3フィート6 $\frac{1}{2}$ 寸(約107cm)・速力時速8マイル(12.8km)・車両連結は不可)が、技術改良によって高速郊外電車としての基礎は固められていった。

2. 郊外生活のすすめ

阪神電鉄・阪急電鉄は、ともに設立当初から市外居住・郊外生活を標榜し、これを都市生活者の新しいライフスタイルとして紹介して、乗客の誘致、経営の安定をはかった。ここに、両社の刊行物がある。

『市外居住のすすめ』(明治41年阪神電鉄)
「本書の編纂に就て 欧米諸国においては田園生活とか、市外居住とか称して此種の書籍も多く発行され、中には数十版を重ねたものもあるとのことであるが、(中略) 我国において専ら市外居住の利益を奨励したものは、

恐らく本書を持って嚆矢とするであろう、
(中略)。私は都市の人士が速に市外居住を
決行して一身の健康と一家の平和を保ち、人
生の最大幸福を享け、事を處するに一層の愉
快を以て国家に貢献せらるゝ所あらんことを
望むのである。」

『如何なる土地を選ぶべきか 如何なる家屋
に住むべきか』(明治42年箕有電軌)

「如何なる土地を選ぶべきか 美しき水の都
は昔の夢と消え、空暗き煙の都に住む不幸な
る我が大阪市民諸君よ！出産率10人に対して
死亡率11人強に当る大阪市民の衛生状態に注
意する諸君は、慄然として都会生活の心細き
を感じ給うべし。同時に田園趣味に富める楽
しき郊外生活を懐うの念切なるべし。」

「如何なる家屋に住むべきか 郊外に居住
し、日々市内に出でて終日の勤務に脳漿を絞
り、疲労したる身体を其家庭に慰安せんとせ
らるる諸君は、(中略)躊躇なく郊外生活を
断行せらるるに至るべし。果然！」

同じ頃(明治40年)、内務省地方局有志の
編になる『田園都市』が出版されている。こ
れらの刊行物は、エベネザー・ハウードの著
した『Tomorrow』(1898)を端緒とするヨー
ロッパの田園都市構想に、強い影響を受けて
いた当時の日本の状況をよく表している。

郊外生活を実現すべく、阪神電鉄は明治42
年、西宮停車場前に貸家30戸を建設し、阪急
電鉄は明治43年、池田室町住宅地約8.9haを
販売した。こののち両電鉄は、未だ郊外であ
った西宮においても次々と住宅を開発してゆ
く。明治43年鳴尾村西畑の文化住宅(70戸)
<阪神>、大正12年甲東園前駅周辺(3.3ha)
<阪急>、昭和3年~12年甲子園一帯の大規
模住宅地<阪神>、昭和5年甲風園(8.6ha)
<阪急>、昭和10年仁川高台(5.4ha)<阪
急>、昭和19年門戸厄神駅周辺(9.9ha)<
阪急>、昭和25年夙川(3ha)<阪急>な
どである。一方、大衆娯楽の開発は、阪神電
鉄では、香櫨園遊園地への補助(明治40年)、
甲子園球場を中心とする周辺の総合的な娯
楽施設の建設(大正13年から)などがある。明

治44年に宝塚新温泉を開業した阪急電鉄は、
昭和12年開場の西宮球場を核として周辺の娯
楽施設を拡充していった。

その他の民間資本による開発では、鳴尾の
遊園地百花園(明治33年)、明治40年・41年
に相次いで完成した関西競馬場・鳴尾競馬
場、最初遊園地や温泉地を併せもった余暇施
設が開かれ、後に住宅地として発展した苦楽
園(明治39年)や甲陽園(大正7年)、西宮
北口駅近くに日本ペイントが開いた住宅地昭
和園(昭和2年)などがあげられる。

大正から昭和初期にかけて、組合営による
耕地整理が実施され、昭和5、6年ごろから
都市計画法(大正8年公布)に基づく区画整
理が行われた。

田畑は住宅地に生まれ変わっていった。

3. 理想的生活

明治末から昭和初期、工業生産の非常な伸
長に伴って、工場が密集し人口が膨張する大
阪市街は生活環境が著しく悪化した。煙の都
と化した大阪で、「健康」をキーワードとす
る市外居住・郊外生活のもたらす効用が、声
高に宣伝されると、都市の新しい階層として
出現してきた給与生活者は、実現性はともあ
れ、郊外生活を理想的生活と考えるようにな
ってゆく。これは、当時より顕在化していた
都市-農村関係に起因する都市問題を住宅
問題に収斂させ、問題を解決する方法として
市外居住・郊外生活が歓迎されたものとみる
ことができる。このようなプロセスは、企業
が、郊外生活という未だ見えざる余暇・娯
楽・生活の需要を現出させ、自らつくり・売
り出すという、今日の消費生活の原型となっ
ていることに注目しなければならない。

今回の特別展は、需要現出に重要な役割を
果たしたポスター・絵はがき・パンフレット
などの広告物を展示し、阪神間としての西宮
における郊外生活文化の、開発の軌跡をたど
るものである。

付記▶ 阪神電鉄株式会社、(財)阪急学園池田文庫には
展示資料借用にさいし、全面的な協力を得た。

▶▶紙面の都合上、参考文献を割愛した。

(ごうだ しげのぶ 当館学芸員)

西宮市内の漁業について

地曳き網漁から船曳き網漁へ

土 居 佳 代

1. はじめに

昨年、市内東町に住む鹿塩健一氏より、モンドリ他多数の漁具をご寄贈いただきました。漁具についてのお話をお聞きするうちに、市内西波止町に住んでおられる高田喜章氏が、以前西宮浜で網元をされていたことを知り、高田氏からも漁業についてお教えいただきました。ここでは高田氏よりお聞きした鰯漁を中心に紹介します。

2. 地曳き網漁について

7～8丁櫓の2艘の櫓こぎの船を16～17人でこぎ、船に網や綱を積み込み、ジカタ（オカから約50mまでの海）でほうりこんでしかけます。その網の綱をオカ（海岸）まで曳き、もってあがり、6～8人が綱をロクロで巻き網を曳き寄せます。網がオカに近付くと、網の綱1本に10人の漁師さん達が、網の邪魔にならないよう網の外側に並び、交互に曳きます。交互に曳くというのは、仮に10人をAグループ・Bグループの5人ずつに分けた場合、まずAグループが網を曳きます。そのまま曳き続けるといつまでも後ろにさがること

になるので、前方の網をとって再び曳きなおします。一旦綱をおいてとりに行くと綱がたるんでしまうので、BグループはAグループが曳いている間に前方の網をとりに行き、Bグループが曳きはじめると、Aグループが前方の網をとりに行くという具合に交互に曳きます。これを繰り返し網を曳きあげますが、網をたるませず常に

ピンと張ったまま曳くのは難しく、慣れていないとたるんでしまうので、必ず網を曳く経験の浅い者は前へ、熟練した者は後ろへと順番に並びます。

3. エンジンの搭載について

昭和24～25年頃から船に電気着火式エンジンがとりつけられるようになり、漁場がジカタから沖（オカから200～300m以上はなれた海）へと移りかわりました。沖でしかけた網をオカまでずっと曳いてきて船をとめ、オカで網を曳っぱりあげる、そういう方法に変わりました。昭和30年頃には、焼玉エンジンが使われるようになります。電気着火式エンジンは、長時間使用するとエンジンが焼けて熱くなるので、一日中漁をするのには向きませんが、焼玉エンジンは長時間使用する程調子良く走ることが出来るため、漁場での作業時間が伸びました。焼玉エンジンの欠点は、始動に手間と時間がかかることと、振動が大きいこと、船の耐用年数が櫓こぎ船の10～13年に比べ、7～8年と短くなったことです。昭和36年頃には、馬力数が今までより高く、振動が少なくなり、リモコン式で始動の楽なディーゼルエンジンに変わりました。この頃に、地曳き網漁から船曳き網漁へかわりました。

4. 船曳き網漁について

5t未満の親船・前船・運搬船と、1～2t程のテンマセン（別称マカタブネ）の4艘を1船団として漁をします。親船・前船は、必ず2艘で網を曳き、2艘コギと呼んでいました。親船と前船は、家が1軒すっぽりはいほどの大きな網で、鰯の群れをとらえます。鰯は下へ下へと逃げる習性があるので、網は必ず底につけるようにします。網の中央には袋がついており、網にそって進んだ鰯は袋へ

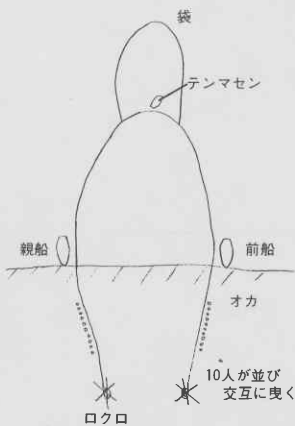


図 地曳き網

(高田氏作成図より)

たまっていきます。テンマセンは袋の上で鰯と網の様子を見て、袋に鰯がたまると、杓を振って親船と前船に合図を送ります。杓は必ず船に積んでいる道具の一つで船の中に水はいるのを汲みだしたり、他の漁師さんとの連絡などに使いました。親船と前船は、テンマセンの合図で袋に鰯がたまつたのを知ると、網の入口を閉めるように2艘を寄せ、鰯を運搬船に積みます。運搬船は1～2時間かかって鰯を浜まで運び、5貫目程はいる枡で量ります。親船・前船・テンマセンは、運搬船がオカへ鰯をあげて戻ってくるまで鰯を追い、運搬船が沖へ来る頃、積めるよう考慮し、漁をします。再び鰯をとらえ、戻ってきた運搬船に鰯を積みまます。

5. 網について

網には綿糸が使われ、オモリになるアシツナはワラ製でした。綿糸は腐りやすいため、3日に1回はたいて、シオダシをして乾かして使いました。ワラは漁師さん達が、強く腐りにくい芯のあるスベの部分で作りました。作ってすぐだと水を含むまでに時間がかかるため、12～1月のカンノミズ（寒い時の水）に1ヶ月程つけて水をしみこませます。水を含んだワラは重くなり、オモリとして使うことが出来ます。

秋頃のタカイアミ（オカから500m程はなれた沖にしかける網）をしかける時は、水深がジカタより深くなり網も多く必要になるため綿糸の網を使っていた頃は、船に網を積むと重くてかさ高くなります。その頃に網をしかけて曳きあげるまでに3時間（ジカタでは1～2時間）かかり、1日に2回程しか出来ませんでした。網には、綿糸からクレモナ・

目次

資料館ノート

第7回特別展 郊外生活のすすめ1900/1950
(合田茂伸) …… 1

寄贈資料一覧…………… 5

収蔵庫ノート

西宮市内の漁業について(土居佳代) …… 3
阪倉氏所蔵『語意考』部分・ともひ詠草真

サラシ・ナイロン等の化学繊維が使われるようになりました。化学繊維は、伸縮性があるので急に力がかかっても切れにくく、水切れが良いので腐りにくく、シオダシの必要もなくなりました。また軽くてかさばらないため、5km程の沖へ出るために、船に網を積んでも場所をとりませんでした。

5. 魚群の探知について

魚群の探知は、セリジャコ（鰯の群れが海水面に頭をあげて泳いでいること。セリジャコがいると海水面の色が変わる。）やヘタリドリ（海鳥が10羽も20羽も飛ばずに海水面で休んでいること。セリジャコを目指し飛来する。）や先走りの鯖（鰯を餌にしている鯖がおよいでいること。）や漁業経験により身についた勘などでわかります。また、漁業経験をつむと、鰯の群れが夏場には日中は沖にいて、夕方涼しくなる頃にジカタへ移動することや、秋頃には沖で群れていることがわかるようになります。昭和30年頃、魚群探知機が導入されると、画面にうつる影の濃淡で魚の量を知ることができるようになりました。

6. 鰯漁について

地曳き網漁は、網に科学繊維が使われたり船にエンジンが搭載され、魚群探知機の導入されたため、次第に船曳網漁へとかわっていききました。昭和45年頃には、沿岸埋立て計画の影響を受け、鰯漁はおこなわれなくなりました。

7. おわりに

これをまとめるにあたり、高田氏には大変お世話になりました。ここに厚くお礼申し上げます。

(どい かよ 当館嘱託)

淵添削・由来書」掛幅について(二)

(池田直子) …… 8

表紙：ポスター「お正月には浜甲子園阪神パークへ」(1935年)

西宮市立郷土資料館ニュース第11号

発行 1992年7月1日 西宮市立郷土資料館
〒662 西宮市川添町15番26号 TEL0798-33-1298

阪倉氏所蔵「『語意考』部分・ともひ詠草真淵添削・由来書」掛幅について(二)

池田直子

三 『語意考』断簡

(A)と(B)は『語意考』の断簡で浜松市立賀茂真淵記念館学芸員寺田氏によれば、筆跡が賀茂真淵のものと同く似ており、由来書があることから、真淵の自筆である可能性がきわめて高い。真淵の書跡はわずかしかなかったおらず、この掛幅は貴重な資料であるとのことであった。

賀茂真淵(一六九七―一七六九年)は江戸中期の国学者・歌人で本姓は岡部、号は県居と称した。荷田春満に国学を学び、元文三年(一七三三)江戸に出て学塾を開いた。田安宗武に仕えて国学を講じた。『万葉集』『古事記』などの古代の古典の研究に没頭し、儒教・仏教などのはいる以前の日本固有の古代精神の意義を強調した。

『語意考』^(注)は賀茂真淵の著作で、明和六年(一七六九)に成立し寛政元年(一七八九)に刊行された。荷田家の説を受け五十音とその構成から、日本語の特質、語源、活用などについて書かれた本であり、『国意考』、『歌意考』、『文意考』、『書意考』とあわせて五意考と呼ばれている。

(A)と(B)の部分は『語意考』を抜き書きしたものである。寺田氏は真淵の五十音について次のように言われた。五十音が漢字(万葉仮名)でなくひらがなで書かれているのはまれで、他の刊本を見れば万葉仮名で書かれている。現在の五十音と比べて気が付くことは、あ行が「を」、わ行が「お」となっており、入れ替わっている。明和六年(一七六九)本居宣長がその誤りを指摘した。また、あ行もわ行も「ゑ」になっているが、明和六年(一七六九)五月九日付宣長あての手紙(『県居書簡統編』^(注))であ行は「え」であると真淵自身が誤りに気付いている。『語意考』の本の

断片を表装したものは他にもあるが、こういう『語意考』の一部を書き出したものは少ないとのことである。

AとBは別の紙に書かれているが、同じ時に書かれたものなのか、別々にあつたものを表装する時に一緒にしたのかはわからない。中川惟幾の由来書に「此五十連の音の約言とこと加へたる詠草とは、県居のうしのともゑ子の君に手つから書てあたへ給へりし御ふての跡なり」とあることから、両方とも真淵がともひ(ともひについては後述)に書き与えたものであると考えてよいだろう。

四 詠草について

寺田氏によれば、詠草はともひの自筆、「」の別筆は真淵の自筆である可能性が高いそうである。

当時、歌会るときにはあらかじめ題が与えられているので、自分で和歌をつくり、師である真淵にその作品でいいかどうかみてもらった。真淵は一番いいものに合点をつけ添削し、細かい助言まで書いている。

このともひの場合は二作目のものに合点がついており、「冬こもり」が「うつたへに」、「ぬれは」が「なはや」、「花や咲らん」が「花の咲なん」と直されており、歌会の席で聞かれたときのために「うつたへに」の意味も横に注記している。こうした真淵による詠草の添削は他にも多く残っている。真淵には三四〇人くらい門人がいたが、そのうち百人くらいが女性であった。他の国学者にくらべて女性の門人が多いのが真淵の特色である。女性の場合、詠草の添削にみられるように懇切丁寧に教えており、真淵の細や

かな心配りが感じられる。

真淵が署名しているものは、当時身分の高い人は真淵ら学者の門人となったが、複数の先生がいる場合他と区別するため自分の名を書いた。この詠草については作者であるともひの署名はあるが真淵の署名はないので、ともひの目の前で真淵が添削しじかに渡したと考えられる。また、通常「〇〇上(たてまつる)」と作者の中の下に「上」という字が入るが、これにはない。最初からなかったのか、前にも詠草があつて最初の一つにだけ「上」という字が入っていたのか、判然としない。以上はともひの詠草を見て寺田氏が説明してくださったことである。

詠草が書かれた紙の余白に中川惟幾が由来書を書いている。とすると、かなり多くの余白がとられていたわけであるが、なぜともひが多く余白をとっていたのか疑問である。もともと長い紙であつても、書いた部分だけの切紙にすることが多い。真淵に添削されるので書き込みのための余白を多めに取つたのであろうと考えられるが、それにしても余白が多すぎないように思う。

五 中川惟幾による由来書

最後の由来書は中川惟幾が書いている。この由来書により掛幅の伝来が明らかである。中川惟幾(一七六一―一八二六年)は銘酒「白菊」を酒造し、屋号を小西屋といい、通名は厚五郎と称した。中川家は累代庄屋も勤めた家柄であつた。惟幾は若い頃から古典の研究をし、加藤千蔭(一七三五―一八〇八年)や京都の伴高蹊(一七三三―一八〇六年)に師事した。加藤千蔭は賀茂真淵の門人で、惟幾は真淵の孫弟子にあたる。惟幾は著作もあつたと伝えられるが、現在は明らかでなく、門下吉井良運のために問答録を作つた『古言鱧』一冊のみのこつている(吉井貞俊氏所蔵)。惟幾は坂倉信明の友人で『桜戸雑話』にもその名が見える。信明と惟幾は親しい友人であつたので、信明からこの掛幅を見せてもらった際、尊敬する真

淵をしのんで、この由来書を書いたのであろう。

詠草(C)と由来書(D)に出てくる「ともひ」あるいは「ともゑ」とは真淵の門人で、江戸桜田に藩邸のあつた毛利大膳太夫の奥女中をつとめていた吉岡弁子という女性である。真淵自筆の『県居門人録』(佐佐木信綱記念館所蔵)には

「 桜田 大膳太夫殿奥

弁子
の
環
禮

とあり、毛利家奥方とともに真淵の門人であつたことがわかる。由来書の中で中川惟幾が「ともゑ」と書いているのは、惟幾が誤つて書いたのか、それとも何か根拠があるのかはわからない。この弁子が毛利の奥方の命を受けて真淵の『古今和歌集』の講義を筆録したものに、上田秋成が補訂を加え『古今和歌集打聴』(一七八九年 以下『打聴』が成つた。弁子の夫・長平も真淵の門人で、弁子の講義録を出版したいと考えていたが二人とも早世したので、長平の弟・野村遜志がその遺志を継いで上田秋成に頼んだことが、『打聴』の遜志による序文及び秋成による附言に見える。弁子、長平がいつ亡くなったのかはわからない。明和二年(一七六五)弁子は毛利家奥方とともに入門しており、明和六年(一七六九)に真淵が亡くなるまでの間に古今和歌集の講義を受けていた。『打聴』が刊行されたのが寛政元年(一七八九)であるから約二〇年近い年月が流れている。その間に弁子、長平が亡くなつたり、上田秋成が弁子の講義録は不十分であるため真淵の著作や秋成の考えから内容を補つたので、時間を費やしたためかも知れない。『打聴』序文に遜志は秋成について「はやくよりこゝろふたつなくあひしたしめる友なりける」と書いており、秋成に対して深い信頼をよせていたのだらう。野村遜志自身は真淵の門人ではなかつたようだが、

『打聴』が出版されたのは遜志の弁子と長平の遺志を遂げようとする熱意によるところが大きいと思われる。

『打聴』の附言を原文のままあげると、

「古今和歌集、はたちの巻の打ぎ、は、あづまの大城のものとなる、ともひ子の君と云が、加茂の県主の翁に問学びつる、其をりくの筆の跡なりけり、こを打よむに、いでそよ、そのかみの時にうまれあひたらむが如、いそのかみふりにし世の心こと葉を、玉銚の道の八十限たちかくれたる事なくてなむ、数へ聞えたるを、口持の臣の御まへさらず打かしこみつ、かづら木の神ひと言をだも漏さじとかいしるしたる、むべ、其人をあひ得たるに愧、此ともひ子よ、我友野村のぶもとのせうど、長ひらぬしが、あづまにいませしほどの思ひ妻になむありける、今やめをと、もに、もみぢ葉の過にし人となむ成に給ひしが、此まめぶみの、ち見よともあらぬさまにてと、まれるを、のぶもとのこ、ろもとよりまめなるにぞ、玉しきの大庭、殿守の部のかき清めてむ事を、おのれにあとらへらる、……(略)……」^(注五)

中川惟幾の由来書は上田秋成の附言の表現によく似ており、惟幾は弁子については『打聴』を参考にしたのではないかと考えられる。

中川惟幾の由来書によれば、野村遜志は「武庫の浦人」で坂倉信明とはゆかりある人であったため、信明の手に伝わったとある。「武庫の浦」というのは武庫川下流の海岸線付近をさすと考えられる。また、『打聴』の序文には「難波なる津野の里人野村遜志しるす」とある。この「津野」は西宮市の津門(つと)という地名と、音がツノとツトで似ている。さらに津野は万葉集に詠われた「津努(つぬ)の松原」であるとも考えられる。津努の松原は現在の西宮市にある松原神社のあたりと考えられている。^(注六)そうすると、津努の松原は津門の一地域なので、津門よりもさらに地域を限定できることになる。いずれにしても、武庫川下流域でツノに音が通ずる地名は他には確認できないので、遜志は武庫川下流域で現西宮市域の海岸

部に住んでいた可能性が高い。信明は西宮に住んでおり、遜志と信明は近接した地域に住んでいたことになる。二人の関係は明らかではないが、何らかの交友関係があったのだろう。惟幾の由来書には、遜志にとつて「信明ぬしはゆかりなる人」であると書かれている。「ゆかり」という言葉には「なんらかの関わりある」という意味と「血縁関係のある」という意味があるから、あるいは血縁、姻戚関係にあったかもしれない。由来書には「こは遜志主の形見と見給ひし」とあり、信明がこの掛幅を受け継いだとき遜志は生きていてもひ・長平の形見としてこれを受け取ったのか、または長平夫婦が亡くなった後遜志が亡くなり、遜志の形見として掛幅を受け取ったのか、この由来書の文面からは判断しにくい。また、信明と弁子は直接の交友関係はなかったであろうと考える。それは弁子の奥女中という役目柄、弁子はずっと江戸にいたと考えられるからである。

弁子は、『打聴』以外に書きのこしたものはなく、『ふくろ』などの書簡集でしか確認できない。『県居門人録』には、西宮の醸酒家千足真言も「千足理兵衛」という名で出ている。真言は宝暦九年(一七五九)春二月に入門し、江戸にいた二年ほどの間、真淵の教えを受け、真淵の門人たちとも親しく交際した。真言が帰国する際には加藤千蔭ら多くの同僚たちが別れを惜しむ言葉を彼におくっている。^(注七)

上田秋成(一七三四―一八〇九年)は大坂の人で、加藤宇万伎の門人である。加藤宇万伎(一七二一―一七七七年)は、延享三年(一七四六)八月に真淵に入門し、加藤千蔭、村田春海、楫取海彦らと共に県門の四天王と称せられた。宇万伎は大坂城々番や京都所司代を勤めており、その在坂中に上田秋成が入門したのである。秋成は本居宣長のみが称揚されることを憤慨し、宇万伎、真淵等らの存在を知らしめることに努めた。^(注七)彼が『打聴』の補訂、出版をひきうけたのも遜志の友人であったというだけでなく、そういう気持ちから引き受けたのであろう。秋成は寛政五年(一七九三)より京都に移り住み、伴蒿蹊とその門下の人々と交流したので、惟

幾、信明とも直接交流のあった可能性がある。ただ、秋成が古事記偽書説などを書いた安々言（一七九二年）を出すと、加藤千蔭は彼を国賊よばわりしていることから、信明はともかくとして、千蔭の門人である中川惟幾との関係は微妙なところであろう。

以上、掛幅の伝来及び掛幅に関係する人物について紹介するとともに師弟関係、交友関係を明らかにした。整理すると左の図のようになる。坂倉信明は真淵の門流ではなかったが、野村遜志と関係があったことから真淵の書蹟を譲りうけた。中川惟幾は真淵に対する強い尊敬から由来書を記したが、惟幾の由来書がなければ伝来の理由も不明になっていたのであろう。『西宮市史』第二巻によればこの他にも西宮にこの時期たくさん文化人がいたことがわかるが、この掛幅は当時の西宮文化人たちの交流の一端を示している興味深い資料である。

最後に、浜松市立賀茂真淵記念館学芸員寺田泰政氏に多大なご教示をいただいた。鈴鹿市教育委員会辻正氏、宇田敬幸氏にたいへんお世話になった。厚くお礼申し上げます。

なお、西宮市立郷土資料館ニュース第六号、第十号の「坂倉信明」は「坂倉信明」に訂正致します。

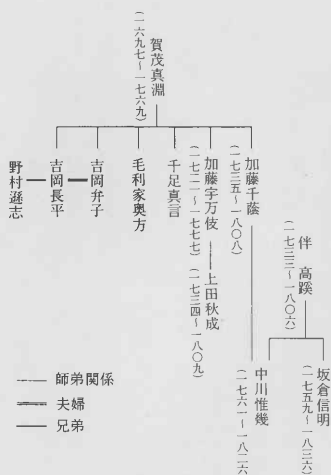


図 人物関係図

注

- (注一) 『校本賀茂真淵全集 思想篇』下 山本鏡編 弘文堂 一九四二年
 - (注二) 『増訂賀茂真淵全集』第十二巻 賀茂百樹再校 吉川弘文館 一九三二年
 - (注三) 『西宮市史』第二巻 魚澄惣五郎編 西宮市役所 一九六〇年
 - (注四) 『賀茂真淵全集』第九巻 久松潜一監修 続群書類完成会 一九七八年
 - (注五) 変体がなほひらかなに、旧字体は新字体にすべて改めた。
 - (注六) 『西宮市史』第一巻 魚澄惣五郎編 西宮市役所 一九五九年
 - (注七) 『日本古典文学全集』四八 英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語 中村幸彦他校注・訳 小学館 一九八九年
 - (注八) 『日本古典文学大系』五六 上田秋成集 中村幸彦校注 岩波書店 一九五五年
- 主な参考文献
- 『賀茂真淵—生涯と業績—』寺田泰政 社団法人浜松史跡調査顕彰会 一九七九年
 - 『賀茂真淵の業績と門流』井上豊 風間書房 一九六六年
- (いけだ なおこ 当館嘱託)

寄贈資料一覧

平成3年(ふ)・除草器・斗枘など農具17点(東本美代治)、掛幅「加藤清正」(上田千代)、ヤンソン日本図複製・大日本行程大絵図・撰津国名所旧跡細見大絵図(三宅勝)、紅溜菓子碗など8点(魚見雅人)、明治23年学力優等の賞状・明治24年大試験学力優等・明治25年優等証・明治28年修業証書・明治22年卒業候事・明治29年卒業証書・明治24年四年生編入・明治26年修業証書・明治20年寄付書・通知簿綴用板など(箕面崎康子)、パインクレストリーフレット(木元達雄)、農耕図屏風(阿弥陀寺)、平成4年・漁仕掛道具入れ(岩井成江)、足踏み脱穀機・唐箕・しろかき器・草取り器・じよれん・土ならし器(西宮市立高須小学校)、手習い・作文・読み方試験・算術試験・図画手習い・通信簿など25点(酒見綾子)、こたつ・火鉢・たばこ盆(西堀源之助)、京都府立第一高等女学校英語教科書(塩見弥世)ご寄贈ありがとうございました。

(平成3年8月〜平成4年5月、敬称略)